

〔修士論文要旨〕

折口信夫と語部

* 山 田 恭 子

折口信夫の小説『死者の書』に登場する当麻語部姫は、作品の前半部(三・四章)では、主人公藤原南家郎女の側で、当麻氏に伝わる氏の物語を語り、後半部分(十八・十九章)では「の尼」として郎女の前に現れ、古語りとともに蓮糸を織る技術を教えるという役割を担っている。序では、当麻語部姫についての論文についてまとめた。

一章では、語部について論じている。語部は、宮廷に所属するもの、地方豪族の下に属し、大嘗祭で古詞を奏上するもの、地方の語部であったのが後に宮廷に所属するようになったものがある。まず、大嘗祭に出仕して古詞を奏上する語部の姿を見ていった。その際、大嘗祭の儀礼と折口の大嘗祭論をまとめ、語部の古詞奏上についてみた。そして、国風や単人舞などの服属儀礼との関連から古詞の内容を考えた。

続いて、他の史料に残る諸国の語部の分布を見、「出雲国風土記」に現れる語臣猪麻呂の説話をまとめた。

一章最後には、その他の語部として天語部と海語部についてまとめる。その際、「古事記」雄略天皇の条にある天語歌の特徴をみた。そして、天語歌と天語部、神語と海語部は関係があったのではないかということ論じた。

二章では、当麻語部姫の描写について論じる。語部姫は、作中様々な呼び方をされている。それは、主人公藤原南家郎女よりも多い。どのような場合にどの呼称をされているかをみた。そして、「万葉集」に載せられている紀女郎と大伴家持の歌三首から、万葉の人々が年老いた者に対してどう思っていたかをみた。そこから、折口の年老いた者たちに向けての親しみをみる。

続いて、「万葉集」にある持統天皇と志斐姫の歌をみた。志斐姫と強ひ語りについてまとめてみた。そして、当麻語部姫の描写にどのように反映されているかをみる。また、語部には女性だけでなく男性もいたこと、語部は巫覡から分化し、発展していったという経緯から、「古事記」にある武内宿禰の説話を例に挙げ、神憑りして語るという語部姫の姿に繋がりがあのではないかということ論じる。

次に、当麻語部姫が隷属する当麻氏について論じた。当麻氏は、宮廷儀礼のうち、誅儀礼にて活躍した氏族であった。そこで、誅儀礼がどのようなものであるかをまとめた。そして、この誅儀礼が語部姫の語りの所作に反映されているのではないかということ論じた。

三章では、折口の考える語部についてまとめた。折口考える語部は、

マレピトが発した神授の呪言を伝承する者として登場する。そして、語り伝える内に呪言が叙事詩となり、口誦文学として発達していったと考え、口誦文学の担い手として語部をとらえた。

終章では、今まで論じてきたことをまとめ、当麻語部嬢がどのような役割をもって『死者の書』に登場していたかを論じる。そして、『死者の書』が描く世界について述べ、語部嬢がその中で人間味あふれる人物として描かれていることを述べた。